RIMS Kôkyûroku Bessatsu
B73 (2019), 83-98

『塵劫記』と書林板元
Jinkoki and Publishers

鈴木武雄

Takeo Suzuki*

Abstract

The first edition of *Jinkoki* 塵劫記 published in the 4th year of Kan'ei 寛永4年, 1627, and it has a lot of riddles. The author thinks that YOSHIDA Mitsuyoshi (吉田光由) did not involve in this edition directly because the 1627 edition has no YOSHIDA's signature and seal of "Kao" 花押. In other hand, the 8th and 11th year of Kan'ei editions of *Jinkoki*, had them. Moreover the 4th year of Kan'ei edition of *Jinkoki* revises them with black at the postscript. Originally there were publisher's names in that place. It is quite possible that YOSHIDA Mitsuyoshi had nothing to do with this publication and its publisher's name was hidden. The publication year of *Jinkoki* printed by old wood block 古活字版, SUGITA's *Jinkoki* 杉田版塵劫記 and 5 volume edition of *Jinkoki* 五巻本塵劫記 are unknown yet, although they are old edition and are important. As medical doctor, SUGITA Ryoan Gen'yo 杉田良庵玄与 closely related to YOSHIDA Mitsuyoshi through MANASE 曲直瀬 family. So SUGITA's *Jinkoki* is a matter of great importance. The edition the 9th year of Kan'ei edition *Jinkoki* 寛永9年版塵劫記 in 1632, was published by the name of NAKANO Ichiuemon 中野市右衛門, which is similar with the 5 volume edition of *Jinkoki* similar publication. But NAKANO was famous publisher in Kyoto, it must be the false edition.

Received November 20, 2018. Revised January 15, 2019. .
2010 Mathematics Subject Classification(s): 01A27,01A45
Key Words: *Jinkoki* 塵劫記，YOSIDA Mitsuyoshi 吉田光由，publisher 書林板元
* 掛川市教育センター, KAKEGAWA City Education Center，620 Mitsumata Kakegawa Shizuoka 437-1416, Japan.
e-mail;pk755733@da2.so-net.ne.jp

©2019 Research Institute for Mathematical Sciences, Kyoto University. All rights reserved.

§1. まえがき

和算書を書林板元(書肆)から考察すると、これまでの歴史と違った見え方ができます。江戸時代において多種多量な和算書が印刷刊行されたのは書林板元による商売が成立したからです。同時に和算書を購入する読者層も存在したことです。

近世初期の書林板元名がある出版物として1593年(文禄2年)『金剛錍文句科』(智円述、日陽科)と思われています。書林板元は、「寺町三条上ル町／藤田庄右衛門」とあります。ただし、実際の刊行は寛永期と思われます。京都の寺町にはその後も多くの書林版元が出現しますが、寺院における仏書の需要と深く関連しています。1814年(文化11年)には京都の本屋仲間に201軒が記録されています。これらと同時にキリシタン版の出版も盛んに行われ、この刺激と影響は大きかったと思われます。1597年(慶長2年)『伊勢物語闕疑抄』(細川幽齋著)には「御幸町通二条／仁右衛門 活板之」とあるように古典籍の出版もありました。もう一つの分野は漢籍と医書です。1598年(慶長3年)『医方大成論』には「山城国上京寺町於于一条道場迎称／寺板正焉」とあります。もちろん書林板元名がない1597年(慶長2年)『歴代名医伝略』(吉田意安・宗恂)などいくつもあります[1]。出版年表から書林板元の活動は寛永元年頃より盛んとなっています。それ以前キリシタン版以外は1593年(文禄2年)刊『古文孝経』のような天皇による勅版、豊臣家、徳川家、島津家など大名による出版、いわゆる官版と多くの寺院による開版、私刊と思われる開版も多くあります。これらの開版は商売を目的としていません。ところが書林板元による開版はそれによる商売が目的です。出版が業として成立するためには、彫師、刷り師、表紙・製本(経師)も大切です。直径50㎝程の桜木からの板木製作(板屋)、楮三潴の栽培、紙漉から印刷用紙の供給(紙屋)、墨・顔料、等々と大きな産業構造を形成されたのです。さらに書籍の販売業、貸本業の形成もありました。実際に近世初期よりこのような書林板元を中心とした出版活動が行われていたことは一大産業が勃興したのです。

いずれにしろ、近世初期から京都を中心として書林板元による出版活動は盛んになりました。この影響は和算書の出版にも及びました。書林板元出版による最初の和算書は、1632年(寛永9年)『塵劫記』(中野市右衛門刊行)です。それよりも少し早い出版と思われるのは、杉田良庵玄与による『塵劫記』です。最初に出版された『塵劫記』は1627年(寛永4年)と序文と跋文にあるものと思われています。寛永期出版の『塵劫記』は、書林板元がないものとあるもの、吉田光由(七兵衛)印花押があるものないものなど、混在しています。

数学史の世界では『塵劫記』の偽版(海賊版)について議論があります。ただし、近世初期において重版や類版の事例は非常に多く書林板元にとって「偽版」という意識はありません。その後、重版及び類版そのものが書林板元経営に悪影響を

[1] 岡雅彦他（2011）『江戸時代初期出版年表』pp.1-277

及ぼした結果、本屋仲間をつくり自己規制をし、さらに町奉行所による出版法令となったのです[2]。

『塵劫記』の偽版は書林板元による出版でもあります。書林板元及び偽版の出現により吉田光由は新たな創意工夫がなされ何度も改版がされました。書林版元にとって和算書の出版はほんの一部のことで、他の仏書、古典籍、医書、漢籍などの出版の方が多いのですが、これらと一緒に宣伝しました。個人出版の販路は限定的です。一方において、有力な書林板元は一族経営であり、分家や支店を出し、京都から大坂、そして江戸へと新出してゆきました[3]。

このように書林板元（書肆）による和算書の出版は、それは即ち和算研究の高度化と多様化、そして武士から庶民に至るまで広く普及するという多くの面で大きな影響を与えたのです。もし近世の出版が勅版、官版、寺院版、私版だけであったならば、和算を取り巻く状況は全く変わっていたでしょう。

§2. 先行研究

１．禿氏祐祥「寛永版塵劫記の類版」『書誌学』(第12巻,第4号,日本書誌学会,1939年)＊本論文は「塵劫記」について書誌学的に論じたものです。特に寛永四年版塵劫記が2種類存在することを明らかにしました。その違いは版心に「上巻･下巻」のあるなしです。

２．平山諦「塵劫記及ビ改算記目録」『東北数学雑誌』vol.45,1939年＊本論文は「塵劫記と改算記」について網羅的に調べたものです。ただ、その後発見された塵劫記は当然収録されていません。特に、個人所蔵のものです。

３．藤原松三郎「塵劫記の諸版」『明治前日本数学史』(第1巻,岩波書店,1954年pp.192-206)＊本書は東北大学書蔵本を中心として詳細に論じています。「寛永4,8,11,18年本は確かに光由の出したものである。現に寛永8，11本小型本には光由の自署本が存在するからである」(p.193)とあります。寛永4年版には光由の自署がありません。寛永4年版は光由が出版に関与していないといえます。

４．柴田光彦「塵劫記版式考－寛永版四巻二十四条本について」『早稲田大学図書館紀要』(第5巻,1963年)＊この論文は塵劫記を書誌学的な見地から論じたものです。寛永4年版が2種類存在するが、その違いは「材木の項」とあります。実際に版心より内容の違いは大きいと思われます。

５．山崎与右衛門『塵劫記の研究；図録編』(森北出版,1977年)＊本書は寛永版塵劫記について写真版図録です。特に、活字横本の現物は現存不明です。ただし。P.69で刊年未詳の五巻本塵劫記(*杉田版)について「杉田勘兵衛玄与開版」と解説していますが、間違いで

---

[2] 中村喜代三（1972）『近世出版法の研究』pp.151-156

[3] 蒔田稲城（1968）『京坂書籍商史』pp.18-40、宗政五十緒（1982）『近世京都出版の研究』pp.25-59

す。杉田勘兵衛と杉田良庵玄与とは異なる人物です。

６．田村三郎・下浦康邦「天理本「算用記」について」『数理解析研究所講究録:1061号』(1998年)＊本論文は塵劫記を専門的に研究したものではありません。ただ、天理大所蔵「算用記」が活字横型本であり、同じ形の塵劫記との類似性を論じています。筆者も同意見で、活字横型本は印刷形式としても古く貴重であると思います。

７．下浦康邦「日本近世数学書所在目録」『和算』(第89号,近畿数学史学会,2000年)＊この論文は寛永版塵劫記を含めて初期和算書の所在を調査研究したものです。貴重な初期和算書は個人所蔵のものが多くあり、研究の難しさを示しています。初期和算書研究の基盤をなすものです。

８．米澤誠「塵劫記の謎」『東北大学附属図書館報,木這子』(vol.28,№3,2003年)＊本論文の特徴は東北大学書蔵本塵劫記を書誌学的に論じたものです。寛永版塵劫記を系統分けし、特に寛永4年版について偽版であるとしています。さらに寛永4年版以前に「原」塵劫記の存在を考えています。ただし、杉田版と寛永9年版については言及されていません。杉田版は東北大学に所蔵していないこともあります。

§3『塵劫記』と吉田光由

『塵劫記』の著者が吉田光由であることは衆知のことです。吉田光由は1672年(寛文12年)に75歳で没しています。それまでに出版された『塵劫記』は多種多様です。最初の『塵劫記』は1627年(寛永4年)と序文と跋文のある版[4]と思われます。また、この『塵劫記』の異版、活字版、再版があり、出版年が不詳であり、不明なことが多いのです。その後、『塵劫記』の出版は寛永年間だけでも1631年(寛永8年)版、1632年(寛永9年)版、1634年(寛永11年)版、1641年(寛永18年)版、1643年(寛永20年)版とあります。しかも、同じ年の出版でも複数の版が残存し、更に新しい版の発見も期待されています。

『塵劫記』の出版は吉田光由が関与しない、いわゆる偽版(海賊版)もあり複雑です。江戸時代初期出版は『江戸時代初期出版年表』によって全体像が明らかになりました。しかし、寛永時代の『塵劫記』で現存書蔵本で完本は少なく、不完全本(零本)や序文、跋文などがないものもあります。江戸時代後期に見られるように、書籍の奥付もなく、刊年や著者名、書林板元の記載されていないものもあります。

§4　寛永四年『塵劫記』と関連する諸版

1627年(寛永4年)の序文の末尾に「于時寛永四年丁卯秋八月日亀毛舜岳贋納

[4] 4巻26條本

玄光為之序」や跋文の末尾にも「于時寛永第四龍集彊梧単閼仲穐好日辰西嶺舜岳野釈玄光以跋」にある『塵劫記』の所蔵を調べてみます。

1. 東北大学附属図書館岡本文庫(上中下)
2. 〃　〃　〃　(一、二、三、四)
3. 〃　〃　狩野文庫(三、四)
4. 〃　〃　狩野文庫(上)
5. 〃　〃　林文庫(下)
7. 日本大学商学部山崎研究室(?)(一、二、三、四)[5]
8. 早稲田大学古典籍データーベース(一、二、三、四)（序文有り、跋文なし）
9. 〃　〃　(上)
10. 吉沢義則文庫本；古活字版横綴本(零本)[6]

「寛永四年」と序文あるいは跋文にある『塵劫記』は未見のものが多いが、現存していても不完全本が多く調査が難しい。

1～9 までは整版本であるが、10 が古活字本であることは古活字版の歴史から注目すべきものです。吉田光由が角倉素庵の嵯峨本の影響を受けたならば、古活字版の存在は非常に重要です。

いずれにしましても、寛永四年版に書林板元の記載はなく、吉田光由あるいは角倉家による開版と考えられます。寛永四年版の跋文中に「此新編塵劫記吉田光由開版」とあるが、やや違和感を感じます。塵劫記の前に「新編」と記載されていることは、寛永四年版以前に塵劫記が存在していることを示しているのではないでしょうか。また、本来は跋文で舜岳が記載するのではなく、別に「吉田光由開板」と印刻すべきことです。

「塵劫記序」

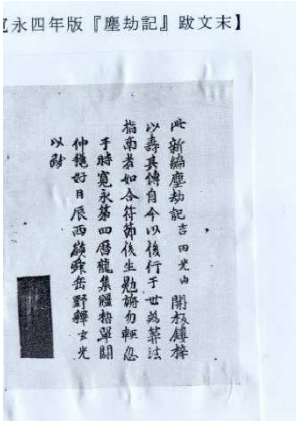
「山城州葛野郡嵯峨村人ｺﾄ吉田光由／頃者介或人扣予柴扉眉毛厮結於是／乎自袖裏携四巻書名奥序／跋予披之観之實算法霊枢也予問云／是誰所作也光由答云我自少時癖算／法而諸家算法繁者芟之略者詳之集／而大成之我所述也此外雖所算書／／数巻有之巻而懐之可謂勤矣予於算／者不識六奥七為什麽塞其責横点頭／者再三雖然不曽饒終弗穫黙止付奥／毛先生毛先生突出曰夫算者自天地／定位萬物流形以来其数及萬有一千／五百二十零数其外更有刻限数人急／数不暇縷数加之伏義始盡八卦周公／叙述九章陽数為奇陰数為偶老陽二十／／五老陰二十五臏合五十数為大ｴﾝ数／既又起律呂七均法宮数者法八十一／商数者法七十二角数者法六十四徴／数者法五十四羽数者法四十八変宮／数者法四十二変徴数者法五十六擧／算極者言之則有一十百千萬億兆京垓杼穰溝澗正載極萬匕極曰恒河沙／萬匕恒河沙曰阿僧祇萬匕阿僧祇曰／／那由他萬匕那由多曰不可思議萬匕／不

[5] 山崎与右衛門（1977）『塵劫記の研究；図録編』p.11。
[6] 山崎与右衛門（1977）『塵劫記の研究；図録編』pp.142-145。他に個人蔵があります。筆者も 2 部所蔵しています。

可思議曰無量大数也擧小数言之／則有埃塵纖微忽絲毫厘分文両斤擧／粮数言之則有栗圭撮勺合升斗斛擧／田数言之則有忽絲毫厘分歩畝反町／然矧算法者濫觴於黄帝時隷首作算／数而□備六藝之一故名算藝者無不／庸以故光由作為此書自此観其書知／／其人名禹無窮擧一明三為後人亀鑑／是以掌内識乾坤者必矣且為題其首／日之曰塵劫記蓋本塵劫来事絲毫不／隔之句莫謗予好維時寛永四年丁卯／秋八月日亀毛舜岳贋納玄光為之序。」（黒塗り）

【寛永四年版『塵劫記』序文末】

其人名禹無窮擧一明三為後人亀鑑
是以掌内識乾坤者必矣且為題其首
日之曰塵劫記蓋本塵劫来事絲毫不
隔之句莫謗予好維時寛永四年丁卯
秋八月日亀毛舜岳贋納玄光為之序


【寛永四年版『塵劫記』跋文末】

此新編塵劫記吉田光由開板鏤梓
以壽其傳自今以後行于世為算法
指南者如合符節後生勤施勿軽忽
于時寛永第四暦龍集彊梧単閼
仲穐好日辰西嶺舜岳野釈玄光
以跋

図 1　寛永四年版塵劫記，序文末 [7]　　**図 2　寛永四年版塵劫記，跋文末** [8]

「此新編塵劫記吉田光由開板鏤梓／以壽其傳自今以後行于世為算法／指南者如合符節後生勤施勿軽忽／于時寛永第四暦龍集彊梧単閼／仲穐好日辰西嶺舜岳野釈玄光／以跋。」（黒塗り）

【小活】通説では寛永四年と序跋にある『塵劫記』をそのまま寛永四年を刊年としています。それゆえこの『塵劫記』を初版本としています。しかし、序跋にある年紀がそのまま刊年とは言えません。むしろ序跋の年紀と刊年は異なるものです。

そこで序跋を見直してみると、その文章の後に通常ある書林板元が彫られていません。その場所は何故か黒塗り長方形になっています。非常に不思議なことですが、これまで誰も指摘していません。黒塗り長方形にしたのは、もともと書林板元名が彫る予定であったが、何らかの理由で中止したと思われます。そのように考えますと寛永四年版『塵劫記』は不可思議なものです。

また、序文をつぶさに読み通してみますと、意味のある文言は最初の五行ほどしかありません。この序文は霊亀山天龍寺の僧舜光が書いたものとしています。それはそれとして吉田光由による自序があってよいと思うが、ないのも不思議です。

寛永四年『塵劫記』目次

---

7 山崎与右衛門（1977）『塵劫記の研究，図録編』p.14。
8 山崎与右衛門（1977）『塵劫記の研究，図録編』p.68。

第一巻　1. 大かすの名の事
2. 一よりうちこかすの名の事
3. 一石より内小かすの名の事
4. 田の名かす事
5. 九九の事
6. 八算のわりの図付かけさんの事
7. 見一のわりの図有付かけ算の事
8. かけてわるさん
9. 米うりかひ同ひようつもり蔵積の事

第二巻
10. 金銀両かへの事
11. せにうりかいの事
12. 万利足の事
13. きぬうりかひの事
14. くろ舟のかい物の事
15. ふねのうんちんの事
16. ますの法
万物に升目つもる事

第三巻　17. 検地の事
18. 知行物成
19. 金銀の薄うりかひ什物におす箔をはる積の事
20. 材木の事

第四巻
21. 川ふしんの事
22. 万ふしんわりの事
23. 木のなかさをはなかみにてつもる事
24. 町つもり事
25. 開平法の事
26. 開立法の事

刊年不詳『塵劫記』（五巻本）

第五巻　32. まゝ子たての事
33. ねずみ子孫つもりの次第
34. ひにひに一ばいの事
35. からすさんの事
36. 金子千枚を開立法にして
37. きぬたてぬきのながさの事
38. 日本国づくしにいふ
39.六里あるみちを四人として馬三疋にて乗あわす時
40. あぶらはかりわけてとる事
41. きぬぬす人をしる事
42. 百五けんの事
43. 材木うりかひの事
44. ひわだまわしの事
45. やねのふきいたのつもりの事
○　開平法
○　開平円法の事
○　開立法

【五巻本の謎】寛永四年版の序文に「四巻」とあり、たしかに 4 巻本です。しかし、その続編である第五巻が存在したことです。しかも、この第五巻部分は、その後の吉田光由自身による開板である寛永八年版でそのまま実現しているのです。それもあってか寛永八年版では序文も「四巻」から「十八巻」に変更しています。

§5　杉田版『塵劫記』（大型 5 巻本）

最初期の書林板元が判明する『塵劫記』を通称杉田版といいます。原本は早稲田大学小倉文庫等にありますが、山崎与右衛門編『塵劫記の研究：図録編』（pp.146-164）に写真復刻されていて便利です。第 5 巻にある跋文の頁に「杉田良庵玄与開版」とあることから、杉田版と言われています。杉田版『塵劫記』は、§4 の 9 古活字版『塵劫記』と同じであるようです。また、杉田版『塵劫記』の序文と跋文は寛永四年版とほぼ同文です。しかし、杉田版は 5 巻本であるので序文の中の「四巻」が「五巻」に変更してあります。また、中間の行が大幅に削除され、さらにルビがあります。

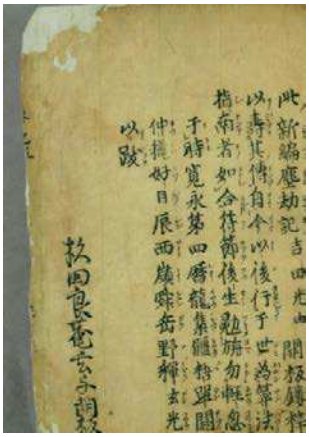


図 3 杉田版塵劫記，跋文末 [9]

また、「吉田光由開版」「寛永四年」などの文言もあります。

本文目次内容も若干の変化があります。第 1 巻の 5.「諸物軽重の事」が追加されている [10]などを精査すると、杉田版は寛永四年版を増補してあります。杉田良庵玄与は寛永四年版よりも異なる増補版の稿本を入手できたのです。

杉田版『塵劫記』の出版時期を考察してみましょう。序文と跋文から寛文四年よりも後年となります。さらに、杉田良庵玄与開版の書籍は 1617 年（元和 3 年）『下学集』から 1632 年（寛永 9 年）『二体節用集』の間と思われます。ほぼ同時期に杉田勘兵衛開版がありますが、異なる書林板元と思われます。このことから、1963 年（寛永九年）が杉田版『塵劫記』出版の下限と思われます。

杉田良庵玄与開版の書籍を詳しく調査することによって、杉田版『塵劫記』の刊年が考察できます。1617 年（元和 3 年）『下学集』、1622 年（元和 8 年）『太平記』、1623 年（元和 9 年）『平家物語』、1624 年（寛永元年）『信長記』、1626 年（寛永 3 年）『吾妻鏡』、1630 年（寛永 7 年）『倭玉篇』、『節用集』、1631 年（寛永 8 年）『新撰朗詠集』、『百人一首抄』、『済民記』（直曲瀬玄朔著）、『恵徳方』、『恵壽方』、『春秋経伝集解』、1632 年（寛永 9 年）『太平記』、『二体節用集』、1640 年（寛永 17 年）『節用集』（杉田良庵玄与編）が現存しています。最後の『節用集』は杉田良庵玄与開版ではなく編となって、尚かつ寛永 9 年版より 8 年も間があり、除外すべきでしょう。

これらを総合的に判断しますと、杉田版『塵劫記』の出版は 1631 年（寛永 8 年）頃、あるいは少し前と考えています。

---

[9] 山崎与右衛門（1977）『塵劫記の研究，図録編』p.164。

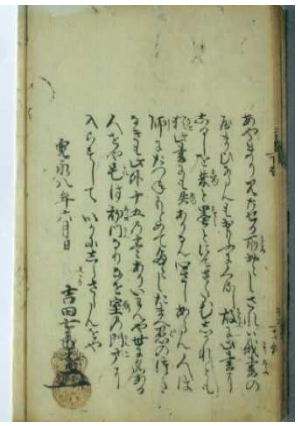
[10] 山崎与右衛門（1977）『塵劫記の研究，図録編』pp.18-32.

杉田良庵玄与開版の中に「洛陽三条東洞院諏訪町」とあり、出版地を示しています。また、杉田良庵玄与は、著名な医師であった曲直瀬玄朔の門人であったと言います。玄朔の門人には「玄」の文字があり、また 1631 年(寛永 8 年)『済民記』は曲直瀬玄朔著であり、門人である可能性を示しています。刊年不明『宜禁本草』の編者雖知苦齋道三とは玄朔の師である曲直瀬道三(一渓)のことであり、杉田良庵玄与との関係を暗示しています [11]。ただし、曲直瀬系統で杉田良庵玄与を発見できませんでした [12]。杉田良庵玄与は医業から離れて出版を業としたからと思われます。曲直瀬道三一渓はキリスト教に入信したようです。

杉田版『塵劫記』の所蔵状況は故下浦康邦氏の調査によると、17 部となっています。1,2,3,4,5 の 5 巻揃いはありません。ただ、杉田良庵玄与開版の書籍は非常に多くあり、しかも現在でも古書店にいくつも出品されています。商売ですから書林板元として『塵劫記』も相当量出版したと思われます。杉田版は 5 巻本にして成功したと思われます。

寛永四年版は杉田版と残存している数量が同程度です。そのように考えますと寛永四年版の有り様を再考しなくてはなりません。すなわち、寛永四年版の出版に吉田光由は関わらず、ある書林板元が出版している可能性があるのです。

§6　寛永八年版『塵劫記』(大型 3 巻本)



寛永八年版『塵劫記』は本文内容面の違いを別にして、寛永四年版と異なる点があります。

１．序文：ルビ付きで３行目「四巻」が「十八巻」と変更されています。

２．跋文：漢文から漢文及び和文草書体になって文言も変わっています。

まず、寛永八年版跋文は漢文と和文草書体の２段に分かれています。漢文部分は寛永四年版と同じです。

図 4 寛永八年版塵劫記，跋文末 [13]

「此新編塵劫記吉田光由開板鏤／梓以壽其傳自今以後行于世／為算法指南者如合符節後生／勤施ナカレ軽忽」

「算数の代におけるや、誠に得難く捨て難きは此道なり。然れども代代此道衰へて世に名ある者少し。然かあるに我稀に或師につきて汝思の書を受けて是を服飾とし領袖として其一二を得たり。其師に聴ける所のもの書き集めて十八巻

[11] 安井広迪（1984)「安土桃山時代に於ける吉田家と曲直瀬家の関係について」『日本医史学雑誌』第 30 巻第 2 号 pp.231-233。

[12] 矢数道明(1982)「曲直瀬道三と玄朔の門人」『近世漢方医学史－曲直瀬道三とその学統』pp.250-255.

[13] 吉田光由の印、花押がある。日本学士院所蔵,請求番号 557。

と成して其一二三を上中下として我に疎かなる人の初門として傳へり。然るを又諸書を刻んで世渡る人是を写し求めて利の為めに世に商ふといえども其詳しきを知らざれば誤り見せたる所多し。されば我書のやむひならんも思ふに苦し。故に此書のしるしを朱と墨とにてさたむ。然れども猶此書にも失ありなん。心ざしあらん人人は師に尋ね求めて正し給え。愚の拙きも此の外十五巻あり。況んや世に名ある人をや。是は初門なり、猶室の門戸に入らずして如何に知らざらんや。」（下線は筆者による）

以上のようにこの和文の跋文には吉田光由の自らの言葉と思われる文言が書かれています。このことは『塵劫記』の出版状況を考察する上で非常に重要なことです。特に「我稀に或師につきて」で「或師」とは誰のことかです。「稀」とい文言がキーポイントです。更に「十八巻」という文言も序文にあるものと同じです。吉田光由にとって序文を訂正せざるを得ないほど重要なことと思われます。

３．吉田光由の自署、花押と印２つがあります。光由署名本は日本学士院書蔵本（下巻）、東京国立博物館本（中巻、下巻）,早稲田大学小倉文庫（上巻、下巻）の他個人蔵が２部あります。
４．色刷版があります。光由署名本は色刷です。
【小活】１～４のことから寛永八年版は吉田光由自身による出版したものと確定できます。

寛永八年版目次

上巻
1. 大数の名の事
2. 一よりうちのこかすの名の事
3. 一石より内の小かすの名の事
4. 田の数の名の事
5. 諸物軽重の事
6. 九九之事
7.八算刻之図、付、懸算
8. 見一刻の図付掛算　見一、かけさ
9. かけてわれる算の事
10. 米売買の事
11. 俵まわしの事
12. 杉算の事
13. 俵の入り積りの事
14. 銭売買の事
15. 銀両替の事

中巻
26. 万づに升目積る事
27. 材木売買
28. 檜皮廻しの事
29. 屋根のふき板、同勾配のびの事
30. 屏風に薄置く積りの事
31. 河普請の事
32. 堀普請の事

下巻
33. まゝ子立
34. はし二つに銀21貫目入るなり、
35. 木のながさを鼻紙にて積る事
36. 町積りの事
37. 鼠算の事
38. 日に日に一倍の事
39. 日本の国尽くに男女数あり
40. からす算の事

16. 金両替の事
17. 小判両替の事
18. 利足の事
19. きぬ、もんめん売買の事
中巻 20. 入子算の事
21. 長崎の買物人相合申す事
22. 船の運賃の事
23. 検地の事
24. 知行物成の事
25. 升の事、昔升の法の事
41. 金銀1000枚を開立に積る事
42 きぬ、ぬの一反の糸長さの事
43. 油量り分ける事
44. 百五けんと云ふ事
45. 薬師さんといふ事
46. 六里ある路を
47. 又三人して袴
48. 開平法
49. 開平円法
50. 開立法

【目次の比較】

寛永四年版と寛永八年版の目次だけを比較しても、同一の項目もありますが、異なる項目があります。吉田光由が寛永八年版を出版するに際し意図的に変更追加した項目と考えられます。

§7　寛永九年中野市右衛門版『塵劫記』(5 巻本)

寛永九年版は東北大学附属図書館林文庫に(三巻、四巻、五巻)と（五巻）といういずれも完本でないが、2 部所蔵されています。第一巻はないので序文は不明です。跋文が寛永四年版と全く同じなので序文も寛永四年版と同じと思われます。書林板元としては通常のことです。巻末には「中野市右衛門開版」と大きく彫られています。書林板元名として杉田良庵玄与と比較して、中野市右衛門は大きく堂々とした彫り方と言えます。中野市右衛門は大手書林板元としての自信が窺えます。

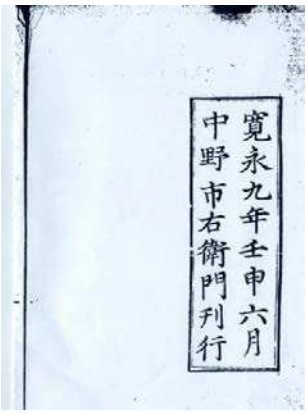


図 5 寛永九年版塵劫記，大尾 [14]

本書の目次を書きましょう。但し、目次と本文の項目が異なっていることもあります。

第三巻
23. 立木のながさをはながみてつもり事
24. 町つもりの事
25. 入子の事
26. けんちの事
27. 知行物成の事
38. 日本国中男女つもりの事
39. 六里あるみちを四人として馬三疋にて乗あわす事
40. あぶらはかりわけてとる事
41. きぬぬす人をしる事

[14] 東北大学附属図書館蔵、林文庫請求番号 545。

第四巻　28. ますの法 付むかしのますの法
29. ます目のつもる事(本文)
30. びやうぶに箔置つもりの事
31. 河普請の事（本文）
第五巻　32. まま子立の事
33. ねずみさんの事
34. ひにひに一ばいの事
35. からすさんの事
36. 金子千枚を開立法にして(本文)
37. きぬたてぬきのながさの事(本文)
42. 百五けんの事
43. 材木うりかひの事
44. ひわだまわしの事 付竹まわしの事
45. やねのふきいたのつもりの事
46. 開平法の事(*本文欠)
47. 開平円法の事(*本文欠)
48. 開立法の事(*本文欠)
49. 入子さんの事(*残五巻本のみ)
50. 諸物きやうじゆう

【目次の比較から】寛永八年版と寛永九年版を比較すると第一巻第二巻は不明ながら、第三巻第四巻第五巻を見る限り、一部異なるものの同じです。このことから中野市右衛門は、吉田光由自身による寛永八年版の開板により、寛永九年版を開板したのでしょう。

第一巻が存在しないので序文は不明です。跋文はルビがありますが、寛永四年版と同じです。杉田版と同じです。寛永八年版の跋文を無視しています。これでは読者にとって寛永九年版の価値は低くなります。しかも、寛永九年中野市右衛門版の残存[15]が他に比べて少ないのは、売れなかったと思われます。これは書林板元としては失敗です。

さて、寛永九年版中野市右衛門版はあまり注目されませんが、書林板元として非常に重要な存在です。中野市右衛門は近世初期京都における書林板元として著名であり最大の存在でした[16]。

初代中野市右衛門の号は道伴といい 1639 年(寛永 16 年)没しています。『近世初期出版年表』から見ると中野市右衛門の最初の開版は、1617 年(元和 3 年)『天台四教儀集注』と思われます。初代中野小左衛門(道也)は中野市右衛門の弟で有力な書林板元でした。更に同じ中野一族であった中野是誰も多数の書籍を出版する書林板元でした。このように、中野一族は京都の書林板元として一大勢力を誇っていました。近世前期において中野一族と思われる書林板元は、中野市兵衛(京)、中野市郎右衛門(京)、中野吉左衞門(京)、中野九右衛門(京)、中野五郎兵衛(京)、中野佐太郎(江戸)、中野次郎右衛門(京)、中野治(次)兵衛(京)、中野仁兵衛(江戸)、中野是誰(京)、中野宗左衞門(京)、中野宗貞(京)、中野太郎左衞門(京)、中野長兵衛(京)、中野伯元(京)、中野六右衛門(京)など多数活動しています。他にも中野姓が江戸でありますが、京都の中野一族の出身と思われます[17]。彼ら中野一族が出版だけでなく販売や貸本まで行いましたので非常に大きな影響力を持

[15] 2 部零本。
[16] 『弁疑書目』(正宗敦夫他（1931）『書目集』上 p.76)等。中野氏の墓は菩提寺である了蓮寺にあります。
[17] 井上隆明（1981）『近世書林板元総覧』pp.424-427。

っていました。

尚、中野市右衛門の出版で重要な数学書は 1659 年(万治 2 年)刊『改算記』(山田正重)です。ただし、初代の中野市右衛門ではなく二代目の出版と思われます。書林板元として中野市右衛門は寛永九年版『塵劫記』の出版で後塵を拝しましたが、『改算記』は『塵劫記』に並ぶほどのベストセラーとなり大手書林板元として面目を果たしたと言えます。

§8　２つの寛永十一年版『塵劫記』

1634 年(寛永 11 年)版『塵劫記』は２種類あります。3 月出版された漢文の序文のある『塵劫記』です。これは寛永八年版の復刻版です。ただし、跋文の後に吉田七兵衛印花押がある版とない版があります。更に、跋文の後に吉田七兵衛印花押がある寛永十二年版も存在するのです。

1634 年(寛永 11 年)8 月 8 日出版『ぢんかうき』(小型 4 巻本)の序文は和文です。さらに末尾に「山城国嵯峨之住人　吉田七兵衛尉印花押」とあり、吉田光由自身によるものです。

寛永十一年漢文版『塵劫記』は書林板元名がなく、おそらく偽版と思われます。その５ヶ月後に吉田光由はそれまで全く異なる

図 6 寛永十壱年版塵劫記,大尾 [18]

和文版『ぢんかうき』を刊行したのです。その序文は、

「それ算は伏義隷首に命じてより周官に保氏を置　これより以来算数世におこなはれて国家の重器たり誠にゆへあるかな　算の要たる事国家をおさめ百姓をみちびくにおよんで方田不足勾股円長あり　その狭広をハカリて其耕をおさむるに井田の法有十一の法あり　もし其法を見たる時は百姓をたやからず　又軍をなし賦をなすに土をひき歩率をまじうるに算数をもつてよく見ちびきおさむるあり　妙なるかな遠山のたかさいたいたらずして爰にしり　海淵のふかき事入ずして底を知る　いはんや天理をや　日月の行道春秋の運気その外巫医百工のたぐい算数によつて吉凶をもとめ血気の順逆をしる　この道によらずして妙をしり理をさとする事なんぞや　しかれ共そのふかきをしり委をさとする事はいたらざれハ得がたし　かるがゆへに其綱領をしるして聖問に入　壱つのたよりとせんとおもへど下愚のまめならざれは　あるひはたらず　あるひはしげくてなんありなん　能あきらかならん人この違闕をたださばまことたすけとならん」

寛永四年版等の序文と比較して、全く異なり、吉田光由自身による文言と思

[18] 東北大学附属図書館蔵、岡本文庫請求番号 7。

えます。

【もくじ】

第一巻　1.大数の名あり
2.小数の名あり
3.粮の数の名あり
4.田数の名あり
5.諸物軽重あり
6.九九のかずあり
7.八さんのわりこゑ　付かけざ
8.見一わりこゑ　付かけざんあ
9.かけてわるさんの事
10.米うりかひの事
11.たはらまわしの事
12.たはらすぎさんの事
13.くらのたはら入つもりの事
14.せにうりかひの事
15.銀両がへの事
16.金両がへの事
17.小判両かへの事
18.よろつ利そくの事
19.きぬもめんうりかへの事
第二巻 20.いれこさんあり
21.長崎のかひ物三人本銀割付事
22.ふねのうんぢんの事
23.けんちの事
24.知行物成の事
25.材木うりかひまわしの事
26.ひわだまわしの事
27.竹束まわしの事
28.屋根のふき板つもる事
29.こうばいののびあり
30.びやうぶにはく置つもりの事
31.はくうりかひまわしの事
第三巻　1.おやのゆつり銀分て取事
2.大工の作料上中下割付渡事
3.両村之高合有を物成を以高を分る事
4.高上中下有を物成ニ付弐分さかりの事
5.橋の入目町中へわりかくる事
6.立木のなかさを積る事
7.町つもりの事
8.つつみわくしやかこの積の事
9.ほりふしんの事
10.ますの法 付むかしますの法も有
11.四かくなる物に枡目積事
12.ひしやくますの法 付斗をけの法有
13.ひらたるをけの法有
14.手たる長たるの法有
15.小をけ大をけの法有
16.つほにますの目積事
17.馬に乗事にさん用有
18.三人としてはかま二くたりを月に廿日つつきると云事
第四巻　1.百万騎の人数ならへて見る事
2.一億の芥子のかすをならへて見る事
3.開平法図あり
4.開平円法図あり
5.開立法図あり
6.ねすミさんあり
7.ひにひに一倍の事
8.日本国中男女の数あり
9.からすさんあり
10.金銀千枚を開立にして積事
11.きぬ一たんの糸長をのへて見る事
12.あふらはかりわくる事
13.百五けんと云事あり
14.やくしさんと云事あり

【跋文】
「右塵劫記度々開版商實法を図に作り、あらわせども愚の作意成故に其くハしきをなさぬにより、或は足らず、或はしげくして世に渡らぬ事をかなしむ。今又朱と墨とにて二乗三乗の法をわけて代につたふ事をねかふ。此外十五の巻あり。執心在之に於ゐては其妙々たる所を可傳者也。」
「寛永十壱年八月八日　山城国嵯峨之住人　　吉田七兵衛光由花押」

と吉田光由自署花押がります。
目次を見ると寛永八年版とほぼ同じです。跋文では「世に渡らぬ事をかなしむ」などと吉田光由自身の心情が書かれています。寛永八年版の序文で「十八巻」とありましたが、この寛永十一年和文版跋文で「外十五巻」とあります。偽版を出す書林板元などに対して、自分は他に 15 巻もの稿本を持っていることを誇示したかったのでしょう。

§9　まとめ

１．寛永四年版『塵劫記』の開版は謎が多く、先ず吉田光由自身が直接関わっていないことです。寛永八年版と寛永十一年和文版に吉田光由自身の署名と花押があることから理解できます。
２．寛永四年版『塵劫記』の序文と跋文の最後にある長方形の黒塗りは、本来開版する書林板元名などを彫るところです。この謎は重要です。おそらく寛永四年版は書林板元名を隠した重版あるいは類版の可能性があります。寛永四年版が初版という定説も疑問があります。
３．少し後に古活字版『塵劫記』(横綴本)、五巻本『塵劫記』、杉田版『塵劫記』(大型五巻本)と立て続けに出版されました。これらの存在が寛永四年版に疑いを向けさせます。古活字版は印刷技術として高度であり寛永四年版以前の出版かもしれません。古活字版には吉田光由の関与が考えられます。
４．杉田版『塵劫記』は古活字版と同じのようですから、杉田良庵玄与と吉田光由は何らの関係がある可能性があります。吉田意安は医家として著名であり杉田良庵玄与も曲直瀬玄朔の弟子として繋がりがあります。
５．寛永九年版『塵劫記』は「中野市右衛門刊行」と巻末に明記しています。しかし、吉田光由自身の署名と花押のある寛永八年版と比較して新味がなく、あきらかに類版（偽版)です。更に吉田光由自身の署名と花押のある寛永十一年和文版の刊行により、中野市右衛門版は市場価値もなくなったと思われます。おそらく吉田光由と中野市右衛門の間に確執が発生したと思われます。それが吉田光由をして寛永十一年和文版『ぢんかうき』や寛永十八年版『新編塵劫記』(小型 3 巻本、遺題本)の開版につながったと思われます。この序文に「…有人算法の道しらすして、ただ利のために我書を求板に開き、朱にて書字も墨となす、是大成あやまりなり。故に二たび此書を板にひらき朱以て色分我書のしるしと可定之吉田光由」一方大手の書林板元として中野市右衛門（二代目道伴）は『改算記』

刊行によって面目を施すことになりました。

謝辞

本研究にあたってＲＩＭＳ「数学史の研究集会」で参加した研究者諸氏から有益なコメントを頂きました。それにより拙稿が充実したものになったと思います。ＲＩＭＳ研究集会を組織して下さったことに感謝申し上げます。

塵劫記の原図については、日本学士院、東北大学附属図書館、山崎与右衛門「塵劫記の研究, 図録編」著作者及び森北出版株式会社などに御配慮を頂き感謝を申し上げます。

参考文献

[1]安藤武彦「出版書林中野道伴伝関係資料」『斎藤徳元研究』(和泉書院, 2002 年)
[2]井上隆明『近世書林板元総覧』(青裳堂書店, 1981 年)
[3]井上宗雄『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店, 1999 年)
[4]上里春生『江戸書籍商史』(出版タイムス社, 1930 年)
[5]岡雅彦他『近世初期出版年表』(勉誠出版, 2011 年)
[6]日下幸男『中野本･宣長本刊記集成』(龍谷大学仏教文化研究, 202 年)
[7]柴田光彦「塵劫記版式考－寛永版四巻二十四条本について」『早稲田大学図書館紀要』(第 5 巻,1963 年)
[8]下浦康邦「日本近世数学書所在目録」『和算』(第 89 号,近畿数学史学会,2000 年)
[9]田村三郎･下浦康邦「天理本「算用記」について」『数理解析研究所講究録:1061 号』(1998 年)
[10]禿氏祐祥「寛永版塵劫記の類版」『書誌学』(第 12 巻,第 4 巻,日本書誌学会,1939 年)
[11]中村喜代三『近世出版法の研究』(日本学術振興会,1972 年)
[12]平山諦「塵劫記及ビ改算記目録」『東北数学雑誌』vol.45,1939 年
[13]藤原松三郎「塵劫記の諸版」『明治前日本数学史』(第 1 巻,岩波書店,1954 年 pp.192-206)
[14]蒔田稲城『京坂書籍商史』(出版タイムス社, 1928 年)
[15]宗政五十緒『近世京都出版の研究』(同朋舎, 1982 年)
[16]正宗敦夫・他「書目集」『日本古典全集』(同刊行会, 1931 年)
[17]森潤三郎『考証学論攷－江戸の古書と蔵書家の調査』(青裳堂書店, 1979 年)
[18]矢数道明『近世漢方医学史－曲直瀬道三とその学統』(名著出版,1982 年)
[19]安井広迪「安土桃山時代に於ける吉田家と曲直瀬家の関係について」『日本医史学雑誌,第 30 巻第 2 号』(日本医史学会,1984 年)
[20]山崎与右衛門『塵劫記の研究；図録編』(森北出版,1977 年)
[21]米澤誠「塵劫記の謎」『東北大学附属図書館報,木這子』(vol.28,№3,2003 年)